

霧社に桜を

【台日文化交流】暨【友好之櫻到霧社】
2015年2月1日 櫻植樹

実行委員長 松本彥彦

日台スポーツ・文化推進協会は、台湾・南投県仁愛郷（霧社）公所との共催で、2月1日“霧社に桜を”プロジェクトを実施した。このプロジェクトは、台湾が日本の植民地であった1930(昭和5)年に霧社事件と呼ばれる抗日暴動が起こった霧社に、和平と友好の証として日本の桜を贈り、文化交流を通じて相互理解を進展させようというものである。

同協会は2005年に設立され、各種文化交流に携わってきたが、特に2011年の東日本大震災後、「謝謝台湾」をスローガンに同年の「黒潮泳断チャレンジ」、2012年「絆の桜植樹祭」（八田與一記念公園）、2013年「八田與一の手紙贈呈式」（台南）などを実施してきた。

今回のプロジェクトも「謝謝台湾」活動の一環ではあるが、霧社において行ったことには次のような理由がある。

2012年に八田與一技師と同郷（石川県）の森喜朗元総理にご同行いただき、烏山頭ダム近くの八田與一記念公園に植えた桜が、一年後には活着率40%という結果になってしまった。当初、公園やダムの周辺に毎年植え続ける予定をしていたのだが、嘉南地方の暑い気候は残念ながら日本の桜には不向きだったようである。

次の計画に思案しているところに、台湾の友人から霧社に行ったことがあるかとの電話をもらった。私は日台交流に携わってほぼ半世紀、訪台歴も200回近くになるが、霧社には足を踏み入れたことがなかった。霧社事件と呼ばれる悲惨な事件があったということは知っており、霧社に関心が無かったわけではないが、正直進んで行ってみた

と思うことはなかった。

友人の話によれば、霧社は標高1200メートルの山岳地で、冬期は寒く、かつて日本時代には沢山日本の桜が咲いていたそうだという。一度案内をするから行って見ないか、と誘われて腰を上げた。最初に出向いたのは一昨年（2013年）3月。結局このプロジェクト実施までに7回も出かけたことになる。

ところで霧社事件とは、一体どんな事件であったのか、もう少し触れてみることにする。繰り返すが、1930(昭和5)年の10月27日台中州能高郡霧社の原住民セデック族マヘボ社の頭目モーナ・ルダオ率いる若者約300名が蜂起し、霧社公学校で開催中の運動会会場を襲撃して日本人137名を殺害した。これに対し日本側は、軍と警察部隊にさらに蜂起に加わらなかった「味方蕃」を動員し鎮圧にあたり、双方合わせて1000名近くの死者を出している。簡単にいえば、これが霧社事件の概要である。

原因については諸説あるが、文化の違いから生じた原住民の日本の統治に対する不満の暴発といえるのか。その頃原住民たちは「首狩り」の習慣があり、病人が出れば呪いによって治癒しようとする生活をしてきた。総督府は、彼らの生活改善を目指し、道路の整備、学校や病院などの建設に使役を課した。こうしたことへの日頃の不満に、巡査が原住民を殴打するという事件が火をつけた。

モーナ・ルダオの長男が、巡回中の吉村巡査を結婚式に招こうとして手を取ったところ、不潔と感じた巡査がステッキで彼を叩いた。これを侮辱と受け取り、巡査を殴ったものといわれている。

昨年刊行された昭和天皇実録に霧社事件に関する天皇のご発言が記されている。石塚英蔵台湾総督から事件の報告を受け、1931年1月16日牧野伸顕内大臣に「事件は単に一巡査の問題ではなく、そもそも我が国の新領土の人民に対する統治官憲の態度は甚だしく侮蔑的、圧迫的であるように思われ、統治上の根本問題であると考えられる」と語られたと。

昭和5、6年といえば、日本でも公開され話題になった映画『KANO』と同じ年代である。地図で見れば山をいくつか隔てるが、霧社から距離的にはそんなに遠くない嘉義での話である。日本人の近藤兵太郎という先生に指導された嘉義農林学校の野球チームが台湾代表となり、甲子園に出場して準優勝をした時のことを映画化したものである。このチームの特徴は、日本人、原住民、台湾人（漢人）の混成であった。烏山頭ダムが完成したのも1930年である。一方では日本人と原住民が殺し合い、他方では一緒に歓喜に湧いている。俯瞰するとこの時期の台湾社会は複雑な様相を呈していたわけである。

この事件からすでに80年以上が経過しているが、原住民たちは日本、日本人に対しどのような感情を抱いているのか。私は霧社に入って先ず何人かに率直に尋ねてみた。「歴史を忘れることはできない。でも日本人と和解をして、将来に向けた友好関係を築いていくことは必要である。」これがほぼ共通した答えだった。

和解とは、表現を変えれば仲直りということである。原住民にとってみれば、80年以上も経っているのに未だ仲直りがなされていないということなのか。私は複雑な心境になった。しかし同時に日本人と仲良くしていきたいという気持ちがあることがわかり、願ってもないことであると嬉しく受け止めることができた。

そして和平と友好の証に日本の桜を贈ってくれないかという話になった。それが過去に涙した多くの悲しみを癒やし、友好のきっかけになるならば是非とも実行するべきではなからうかと思った。

霧社では深紅色の山桜や霧社桜と呼ばれる白い桜が咲く。その中に日本の桜が仲間入りして春には競艶する。そんな風景をイメージして胸をときめかせた。この一帯が桜の名所となり、多くの人々、特に日本人も訪れる意義ある観光地として発展すれば、霧社の人たちも喜んでくれるのではないか。「黒潮泳断チャレンジ」以来の若手リーダー鈴木一也君をはじめとするボランティアメンバーに働きかけ、日台スポーツ・文化推進協会に“霧社に桜を”実行委員会を設け、早速桜を贈る準備に取りかかった。

公益財団法人交流協会、台北駐日経済文化代表處の後援、台湾交通部観光局の協力さらに廖了以先生、海部俊樹、森喜朗両元総理、小泉進次郎代議士をはじめ、学者、文化人など各界のご理解を得て応援団を組織した。仁愛郷公所すなわち霧社の役場からは、正式に我々の実行委員会と共催で式典を実施しようという話が出た。勿論、当方に異論などあるわけがない。こうして現地でのこのプロジェクトは公式行事として行われることとなった。

これまで台湾の各地に桜を植えてきた経験上、染井吉野を台湾で咲かせるのは難しいことだと知っている。しかし日本の桜といえば、なんといっても染井吉野である。この桜は、年間に20日以上寒い日がないと咲かないと聞くし、枝が鳥の巣のようにくしゃくしゃと丸くからみあう様なテングス病とかに罹りやすいという。寒さという条件に関しては霧社は問題無いが、専門家のアドバイスを受け、花が染井吉野に似ていて病気にも

強いとされる神代曙という品種を400本、それに台湾には1本もないという枝垂れ桜100本を贈ることにした。日本で検疫を受け、さらに台湾でも仮植えをして1年間の検疫を受ける。しかる後に目的地に移植できるという手続きが必要なのである。イベントの実施日を現地と相談の上2月1日と決め、その前に最終検疫が終了するよう昨年1月に苗木計500本を出荷した。

霧社で友好行事を催すとなれば、なるべく多くの日本人に参加をしてもらいたいと思い、「恩讐を超えて友好を」という呼びかけで広く募集を始めた。仁愛郷公所の担当者とも協議を重ね、イベントの正式名称は、標記のように決定した。桜の贈呈・植樹だけではなく、相互理解に少しでも役立つようにと文化交流も行うことにした。

準備もほぼ順調に進んでいた昨年の11月29日、台湾では地方自治体の選挙が行われ、仁愛郷長がそれまでの郷長とは反対派の人に交代することになった。私は、前郷長の下で進めてきたこの企画が激しい選挙戦を経て当選した新郷長に素直に引き継がれるかどうか不安を抱いた。最終打ち合わせの為に霧社を訪れた12月19日の夜、嬉しいことがあった。12月25日に新郷長の就任式を迎える孔文博氏が、家族との夕食会に私を招待してくれたのだ。

初対面にもかかわらず、孔氏にはこやかに私を迎え、夫人をはじめ家族一人ひとりを紹介し歓待してくれた。是非“霧社に桜を”プロジェクトを力を合わせて成功させようと私の手を固く握りしめてくれた。孔文博氏は、御実兄の孔文吉立法委員の秘書を務めていたという。堂々たる体躯に柔和な表情を浮かべたいかにも包容力がある人物というのが私の第一印象である。宴の最中、抗日英雄とされている霧社事件の首謀者モーナ・ルダオのひ孫に当たるヨン・パーワン夫妻を呼んで引き

合わせてくれた。案ずるより産むが易し、すべてはうまくいくと確信を持つことができた。

このプロジェクトに参加したいという人の数も日に日に増えて、日本全国から約200名、在日日本人約50名と予想を上回り、私の責任も一段と重く感じられるようになった。せっかく霧社まで行っていただくのだから参加者全員に霧社事件について一定の知識を身につけてほしいと考えた。そこで霧社事件の研究者としては第一人者である早稲田大学台湾研究所の春山明哲氏と台湾に関する著作を何冊か出版している友人のノンフィクション作家の門田隆将氏に現地で講演をお願いすることにした。

1月30日。いよいよプロジェクト実施の日が迫ってきた。実行委員会のメンバー数名が先発。朝羽田を発って、夕刻には宿泊先の廬山温泉のホテルに到着。早速準備にとりかかる。

廬山温泉は、霧社の中心地から車で20分ほど先に進んだ台湾で最も高い所にある温泉である。日本時代には富士温泉と呼ばれ、碧湖に注ぐ川辺にホテルが並ぶ温泉郷である。しかし数年前の洪水によって兩岸のホテルが数軒流失され、その痕跡が生々しく残っている。そんな影響もあって、その後廃業するところも増えているという。往時は賑わっていたであろうと想像させる雰囲気はあるが、今は寂れてしまっていて気の毒な思いがした。

1月31日。「恩讐を超えて友好を」としてスタートしたこのプロジェクトである。私は、事件に関係した全ての人々の霊を慰めることから始めたいと思い、メンバーと連れだって数カ所を巡礼することにした。最初にモーナ・ルダオをはじめとする「抗日英雄」とされる人たちの墓。そして日本人137名が殺害された旧公学校校庭（現在は

台湾電力用地)、次いで今なお70数体の遺骨が埋まっている日本人墓地の跡地、さらに事件の最中日本人を救助したセデック族の老頭目ワリスブニの墓に詣で、献花をし、黙祷を捧げた。途中会場へ立ち寄ってみると、何組かの母子たちが会場の周囲を飾るため、桜の花びらを模した紙を糸に括り付ける作業を一生懸命やっていた。その様子を見て胸が熱くなった。原住民の人たちも私たちと同様、明日のイベントに思いを馳せているのだろうと。

原住民でありながら日本の警察に登用された二人のセデック族がいた。彼らは事件発生によって日本人と自分たちの部族との間で板挟みになり、苦しみ抜いた挙げ句、一人は割腹自殺、もう一人は首を吊って亡くなった。兄弟ではないが同じ花岡姓である。つらいことにこの二人の家族たちも同じ場所で後を追って亡くなったという。その場所というのは霧社の集落からかなり奥まった、その後花岡山と呼ばれるようになった小高い山である。今ではこの二つの家族が眠っている花岡山を知っている人は霧社にも殆どいないようだ。

日没少し前、私たちは役場の人をお願いして花岡山にお参りに行くことにした。先ず集落のはずれに近い一軒に80歳を過ぎたお婆さんを訪ねた。その方は花岡一郎の親戚だという。彼女は人里離れたその山と谷一つ隔てた所に案内してくれた。そこで、お婆さんはセデック族の言葉で、花岡山に向かって、私の手を取り「日本人がお墓参りに来てくれましたよ」と呼びかけた。さらに美しい澄んだ声で歌をうたった。まるで映画のような実に感動的なシーンで、思わず涙が溢れた。

花岡一郎、次郎そして彼らの家族たちの当時の心境を想像し、私も思い余って山に向かって大声で叫んだ。「霧社の人たちと仲良く付き合っていくために、日本の桜を届けに来ました。皆さんが尊い命を亡くして85年が経とうとしています。



花岡山に向かって

どんなにか辛い思いをしてこられたことでしょう。どうか安らかに眠ってください。」

山岳地帯の霧社の夕暮れは早い。明日の好天を占うかのような美しい夕焼けも、あっという間に闇に包まれる。6時半頃、東京、名古屋、大阪からの参加者一行が、廬山温泉のホテルに到着した。それぞれのグループが、早朝日本を出発し、台北から台中までは新幹線、さらにバスを乗り継いで埔里経由霧社へという行程である。

霧社の入り口ともいべき「人止めの関」からは急勾配のうねった山道が続く。女性や高齢者の中には気分が悪くなる人も出るのではないかと心配していたが、杞憂に終わった。最高齢は86歳で、80歳以上の参加者が7名。全員が大丈夫と笑顔で応えてくれた。

一息ついて夕食会と二人の講師による研修会を開催し、その後は各々温泉を楽しんで旅の疲れを癒やした。

2月1日、本番の日。

会場は二カ所に設営されている。一つはかつて事件のあった旧公学校校庭の跡地で、現在は台湾電力の用地となっている広場。もう一カ所は道路を挟んだ坂下の隣地である。こちらがメイン会場で、早朝から立派な仮設ステージと会場を覆うテ

ントが張られ、椅子が500脚用意されている。ステージ上には音響装置一式がセッティングされ10時の開会を待つばかりに準備は完了。朝から快晴に恵まれ、山あいの空気は実に美味しい。しかも会場の周りを山桜が取り巻くように満開に彩り、言うこと無しの状況。

孔文博郷長は9時前から会場に出向き、手伝いの人たちに声をかけている。日曜の休日を返上して働いてくれている公所の人たちだろう。9時過ぎになると原住民の家族や台湾日本人会の人々、そして日本からの一行が次々に来場。テントの脇には山豚を丸焼きする煙が立ちこめ、原住民がついた餅や白酒が模擬店のように並んでいる。今では貴重な原住民の織物を実演する用意もされている。

来賓の日本側、交流協会台北事務所沼田幹夫代表、浜田隆総務部長と鈴木康弘領事、台湾日本人会の荒牧直樹常務理事をはじめ幹部の方々、台湾側、外交部亜東関係協会羅坤燦秘書長、孔文吉立法委員、呉文思仁愛郷民代表会主席、南投県陳正昇副県長と王源鐘観光處長も相次いで到着。

10時、司会者が開会を告げ、東京芸大出身で世界各地を巡礼演奏し続けている西村直記氏が自ら作曲した荘重な「霧社の調べ」の演奏でオープニング。現地主催者を代表して孔文博郷長が「日本

から贈られた桜は、友好の象徴であるのみならず、仁愛郷にさらなる彩りを添えるものであり、しっかりと育てて美しい花を咲かせたい」と挨拶し、日本側への謝意を述べた。次に私が実行委員長として、プロジェクトの主旨、目的さらに将来への夢について触れ、日本にとってかけがえのない友人である台湾の皆様へと「謝謝台湾」「日台友好、永遠なれ」をアピール。来賓である沼田代表からは、このプロジェクトの歴史的意義について評価を戴き、「本日植樹される桜は、これから10年、20年、50年、そして100年とここ霧社で美しく花を咲かせるでしょう。」と、南投県を代表した陳副県長からは「このプロジェクトは歴史を超越した友好であり、感動を覚える。今回の桜植樹によって台日友好はさらに深まり、日本人の観光誘致も進み、仁愛郷の観光発展にもつながるものである。」と賛辞を戴いた。

孔立法委員は、父親が昔日本名を田中学といい、廬山地域では日本語教師を務めていたということ、さらに日本に対する感謝の記念として家の側に桜を植えていたということなど日本に対する友好の気持ちを述べられた。

私から郷長へ桜の目録贈呈を行い、次いで全員で、歴史を思い起こし、全ての御霊に対し和平と友好の誓いを込めて一分間の黙祷を捧げ、代表者による献花を以て式典を終了した。その後、舞台



盛大な開会式の様子



挨拶をする松本実行委員長



仁愛郷長に目録を贈呈



桜の植樹風景



霧社事件の全ての犠牲者に対し献花



仁愛小学生の伝統舞踊

を旧公学校校庭跡に移し、植樹、写真撮影、全員による献花。再びメイン会場に戻り、地元名物の排骨飯弁当や模擬店に並ぶ霧社のご馳走に舌鼓を打ちながら第2部文化交流へとプログラムは進行した。

女流書道家佐竹燿華さんによる「桜舞」二文字の書道パフォーマンス、タレントでもあるソロシンガー鹿谷弥生さんのギターによる弾き語り、西村直記氏の自作「霧の社（やしろ）」の歌唱、鏡味仙志郎、翁家和助両氏による太神楽（曲芸）が日本側から披露された。原住民側からは、仁愛小学校生徒によるセデック族の伝統舞踊、喜裂克文化芸術団による歌と踊りの民族芸能。どれも素晴らしい芸能文化である。

これらの出し物の合間合間に日本企業から提供された品物やプロカメラマンが撮影した富士山の写真のパネル（5枚）、エバー航空の東京・台北間の航空チケット（2枚）等の福引き抽選を行った。最後に大いに盛り上がったのは、霧社の春陽教会の女性たちが披露した東京音頭の踊りである。100年も前に日本教師に教えられ、それを現在まで代々受け継いできているのだという。「踊り踊るなら、ちょっと東京音頭」そのままであるが、霧社事件を経ながらも日本の民謡を踊り続けてきた理由は何だったのか、私には不思議に思えた。原住民の間に入って日本人も一緒に輪を作って全員で踊り、これがフィナーレとなって3時前に全てを終了した。

日本人の一团が次々に会場を退出するまで孔郷



原住民と一緒に東京音頭

長をはじめ公所の人たちが手を振って見送ってくれた。私たち実行委員会メンバーも霧社の人たちと別れの挨拶を交わし、うしろ髪を引かれる思いで霧社を後にした。

この日の催しは台湾のテレビ、新聞、日本の新聞でも報道されたが、そのいずれもが好意的な内容で、一つとして批判的なものがなかったのは率直に言って嬉しかった。霧社という歴史的に特別な地域での行事には、台湾で一部「なんで今さら霧社で」という中傷的言動があったことも知っている。しかし私には霧社の人たちが和解と友好を望んでいるのに、何もせずに歴史の傷跡に蓋をして、そのままに放置していいとは思えなかった。私たちの協会は、もとより民間団体であり、実行委員長の私とて一民間人に過ぎない。従って、今回のプロジェクトが成功したからといって、それで果たして霧社と日本との和解が実現したと言えるかどうか分からない。先方がどのように受



セデック族の皆さんと

け止めてくれたのかは、いずれ機会をあらためて聴いてみたいと思う。しかし、なんといっても仁愛郷公所という公的機関が、私たち協会と共催という形をとり、新郷長が積極的に協力してくれたことは事実である。そのことが日本との平和と友好を望んでいる何よりの証であると理解して間違いない。そして霧社の住民たちも、日本に対し、長く閉ざしていた心の扉を開き、友好に向けた関係改善に気持ちを動かしてくれたのではないかと期待をしている。これで霧社との関係が全て終わったわけではない。今後どのように付き合っていくべきなのか、課題は残っている。

終わりにこのプロジェクトを後援して下さった公益財団法人交流協会、台北駐日経済文化代表處、また台湾交通部観光局、財団法人台湾武智紀念基金会さらに多くの法人、個人の皆様に心から感謝を申し上げる次第です。